まちの皆様にインタビュー！

このコーナーでは、宮代町に在住・在勤・在学など宮代町に関わる方々にお話を伺っています。

今回のインタビューは、宮代町在住の舞台女優・深谷由梨香さんです。深谷さんは、お子さんが通っていた幼稚園で出会った大人たちと２０２０年ごろから「劇団みんなのはらっぱ」を立ち上げ、その代表も務めています。中学生のころに授業で演劇に触れたのがきっかけで演劇の世界に入り、子育てを通じて人と関わることに深く興味を持ったという深谷さんにお話を伺いました。

【 進修館と新しい村に魅せされて移住 】

深谷さんは東京都出身。結婚を機に、夫の実家である幸手市で暮らし始めました。たまたま子どもと一緒に新しい村に遊びに行った時に、「新しい村と進修館の空気に一目ぼれをして『住んでみたい！』と思った」のがきっかけで、2018年に宮代町に引っ越ししてきました。越してきて間もなくコロナ禍となり、外出もままならない時期が続きましたが、そんな中、新しい村などの自然の中を散歩することで、さらに宮代町が好きになったそうです。宮代町には、緑豊かな風景や建築など、貴重なものが普通の生活に溶け込んでいる。遊園地までもが生活に溶け込んでいる。深谷さんはそうした渾然一体となっている空気感が大好きで、子どもが毎日見る風景として何よりもいい場所だと感じているそうです。

2023年夏に進修館で開催された「進修館をあそぼう」は、演じ手も観客も一体化してしまう不思議な時間となりました。作り上げる楽しさ、観る楽しさ、進修館の建物を味わう楽しさなど、楽しい要素が盛りだくさんの催しでした。

【「進修館をあそぼう」】

宮代町に越してきて１～２年くらいたったころ、友人から「笠原小学校に関する演劇を作らないか」と誘われたのがきっかけで、宮代町について色々調べ始めたという深谷さん。その中で、町の歴史や初代町長齋藤甲馬氏の生涯にとても興味を持ち、それを機に町の様々な人に話を聞き始めました。そして２０２３年夏、ご自身が集めた話をもとに、演劇のワークショップを通じて宮代町の歴史に関する演劇作品を完成させる、という企画に挑戦します。進修館全体をくまなく利用し、回遊しながら演じられたこの作品では、観客より出演者が多いという不思議なものになりましたが、演じ手として参加する人が作品を通じて次第に巻き込まれていき、フィナーレの会場となった芝生広場では、進修太鼓の勇壮な演奏の中で民俗舞踊連盟のメンバーも加わって宮代音頭を踊る大団円となりました。

【 地元の人の話を聞き作品にしていきたい 】

深谷さんは現在、宮代町に暮らす「普通の人」の生活やエピソードを織り交ぜた作品をつくるという夢を持っているそうです。少しずつエピソードを集めていって、いずれは「宮代町ミュージカル」のようなものができたらいい、と目を輝かせていらっしゃいました。また、１１月４日に大ホールで行われる、沖縄県今帰仁村との文化交流イベント「北山（ほくざん）の風」や「いまじん太鼓」の公演にはとても興味を持っているとのこと。「子どもたちが地域の歴史を学びながら作品に取り組むということが素晴らしいと思う」と話していました。先日、盆踊りを見た外国人から、「これはなんだ？」と言われたことがあるそうで、その時踊り手に年配の人が多かったからか「高齢の人が踊る文化なのか？」と聞かれたことで、踊りの文化が若年層に伝えられていないことを感じ、何かできないか？と思ったのだそうです。当たり前に身の回りにある事柄や文化を、次の世代に伝えていきたい、そのためにも様々な人と話をしたい、という深谷さん。今後その思いがどのような作品になっていくのか、とても楽しみです。

「演劇では人の人生の一面だけを、短い時間で表現することしかできないのかも」という深谷さん。だからこそ、時間をかけて人とじっくり話をし、多面的にその人を知りたい、と話してくださいました。

「いつでも、どこでも、誰とでも演劇をしよう。」
というスローガンを掲げ、
楽しいことならなんでもやりたい、
と活動している「劇団みんなのはらっぱ」。
大人も子どもも楽しそうです。

インタビューした深谷さんも参加します！

参加者募集！ 宮代町民俗舞踊連盟といっしょに、今帰仁のみなさんを舞踊で歓迎しよう！

１１月４日（月祝）に大ホールで開催される、「現代版組踊 北山の風 with 今帰仁子ども太鼓いまじん 公演」の会場で、宮代町民俗舞踊連盟のみなさんと「宮代音頭」「南中ソーラン」を踊って、今帰仁のみなさんを歓迎する舞踊チームのメンバーを募集します。
参加いただける方は、公演チケットの割引があります。

※ 舞踊の練習会も開催します。是非ご参加ください！

舞踊チーム練習会

日　時：
10月20日（日）
14:30 ～ 16:30
場　所：大ホール
参加費：無料
申　込：進修館受付
（〆切 10月10日）

教えて、田沼さん！「進修館のあんなこと、こんなこと」第３回

このコーナーでは、進修館の建設時に宮代町役場職員として関わった田沼繁雄さんに、当時のエピソードなどを伺います。

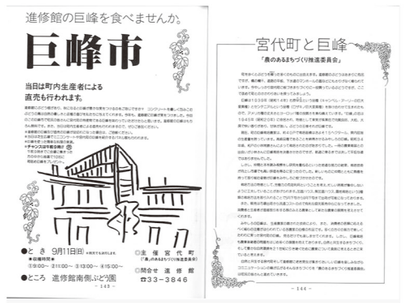
２０２４年の夏は、とにかく暑かった！進修館の建物に掛かるぶどう棚も、暑さのためか元気がありませんでした…。もう見慣れた風景になっているけれど、そもそもどうして進修館にはぶどう棚があるのだろう？気になって調べてみると、象設計集団のみなさんは進修館を設計する際、その地域の特性を取り入れたことがわかりました。当時宮代町が埼玉県内でも有数な巨峰の産地だったことから、それがぶどう棚として表現されたのだということです。宮代町の特色をデザインに取り入れた建物が、その土地を代表する植物に覆われていく。長い時間をかけて建物が完成していく仕掛けが施されているなんて、やっぱり進修館はおもしろい！

そんなことを考えていると、宮代育ちの進修館スタッフが「わたし、子どものころ進修館でブドウ狩りをした記憶があるんですよね。ぶどうにちなんだイベントもやっていたような気がします。」と話してくれました。え？ぶどうのイベントって新しい村じゃないの？気になったので、田沼さんに聞いてみました。

１９９４年、宮代町では地域資源をまちづくりに活かすことをテーマに役場職員メンバーで様々な議論を重ね、宮代町の中にある「農」を題材にした「農のあるまちづくり」プロジェクトがスタートしました。この中で、「進修館のぶどう棚にはお盆のころ巨峰が実をつけるけれど、それを活かせないか？」という意見が出され、「巨峰市」が開催されたのだそうです。町の巨峰組合にも声をかけて販売も行われ、大盛況だったとか。進修館スタッフの記憶にあったのは、この催しだったようです。

酷暑のせいか、巨峰も夏バテしてしまったのでしょうか…。今年の進修館のぶどう棚は元気がありません。

進修館のアーカイブ資料の中には、農のあるまちづくりに関する資料がありました。「巨峰市」開催に至る経緯も記載されていました。



巨峰市では、進修館のぶどう棚での巨峰狩りが行われたようです。「進修館南側ぶどう園」と書かれるほど、当時は豊かに実っていたのですね。

「“外”から再発見、進修館の魅力」第１回

このコーナーは、進修館でアルバイトしている日本工業大学の学生（地元は福島）が、町外から宮代町に越してきて感じた、進修館の魅力について語るコーナーです。

日本工業大学建築学科１年の浦山です。10月からは受付業務のほか、進修館だよりの記事作成もお手伝いさせていただきます。

宮代町に来て最初に進修館を認識した風景。第一印象は「なにこれ、すごい！」。初めて入ったルートは、芝生広場→ロビーでした。

みなさん、こんにちは！この度、進修館だよりにて新しく１コーナーを担当させていただくことになりました、日本工業大学建築学科１年の浦山と申します。今年の４月に大学進学のため、この宮代町に引っ越してきて早半年が過ぎようとしています。おかげさまでこの町での日々はとても充実しており、毎日楽しく過ごしております。もともと日本工業大学に進学予定だった僕が最初に宮代町に訪れたのは、大学のオープンキャンパスがきっかけとなります。その際に大学の教授とご縁があり、今僕はこちらの進修館にてアルバイトをしています。

この進修館は建物自体の魅力や工夫もさることながら設計にまつわる素敵なエピソードもたくさんあります。しかし宮代町で生まれ育った方の中には、進修館は当たり前の見慣れた景色の一部すぎて、かえって進修館の持つ魅力がわかりづらいことも多々あると思います。そこでこのコーナーでは、宮代町に住んで間もない“外”から来た僕だからこそ気付いた進修館の魅力をお伝えしていけたらと思います。来月は進修館が出来るきっかけとなった出来事や進修館の魅力について、お話したいと思います。それでは、来月からよろしくお願いします！